

母に守られて助かった奇跡の子ども



松原 俊明(まつばらとしあき)さん(69) 昭和 20(1945)年 旧東淀川区木川生まれ。生後2日で崇禅寺で空襲に遭うが、母に抱かれて命をとりとめた。その際の機銃掃射で母を亡くしたが、様々な人の助けを受けながら今年70才を迎える。戦後ともに歩んだ人生を振り返っていただいた。

越賀道一と嘉津子の長男として生まれました。父の道一は崇禅寺に生まれた長男だったのですが、当時兵隊として戦争に行っていました。その頃の大阪は空襲が相次いでいて、生まれたての小さな私を抱えた母・嘉津子は木川の自宅から、道一の妹夫婦（西岡祖学※・マキコ）がいた崇禅寺の平屋に疎開することになったと聞いています。

そんな中で空襲に遭いました。生後2日目(昭和20年6月7日)のことです。今も崇禅寺の境内に残るクスノキの前に離れの平屋があって、私を抱いて逃げようとした母は機銃掃射で眉間を打たれて即死しました。幸い私は母に守られて命を取り留めました。もちろん、私は覚えているわけありませんが、法事なんかで親戚が集まるたびにこの話は聞いてきましたよ。

終戦後、父の道一は戦地から戻り、崇禅寺は西岡祖学さんら妹夫婦にまかせ、

自分は尼崎の全昌寺へと行くことになります。とはいえ妻を亡くして乳飲み子である僕を抱えて行くわけにもいかない。そこで私は嘉津子の母、つまり母方の祖母・松原ヒサ子の養子にもらわれることになりました。松原の家には姓を継ぐ子どもがいなかったのも理由だと思います。

木川東にあった祖母の家で二人で暮らしていましたが、小学校にあがることから叔父と叔母も一緒に暮らすようになりました。この叔父さんと叔母さんがとても厳しい人でしてね。二人には子どもはなかったので、自分の子どものように育ててくれた。僕が今あるのは彼らのおかげなんです。自分の境遇について理解したのは小学校3～4年生の頃でしょうか。

木川小から十三中学、北野高校に進学し、関西学院大学の経済学部に入りました。大学では謡曲部に入り、同志社女子大学の能楽部長と知り合ったんです。その時の彼女が今の妻。卒業後、神鋼商事に入社し26才で結婚して2男1女に恵まれました。今は孫が5人もいます。

毎年、お盆とお彼岸、家族の命日には崇禅寺のお墓にむかいます。お堂の向いにある母の墓を訪ねて、大きなクスノキを見るたびに「お母さんはここで僕の代わりに亡くなったんだなあ」と思いますね。戦争で孤児になった人も多かったのに、僕は母親の分まで命をもらって、まわりのみんなに助けってもらうことができた。生みの親より育ての親。本当に感謝しています。実は最近、次男を37才で亡くしました。まだ小さな子どももいるので、今度はおじいちゃんの僕が頑張って手助けできればと思っています。

僕は戦争の経験があるわけではないけれど、絶対にしたらあかんと思います。戦国武将の話は好きですが、それと戦争は違いますもんね。

=====
※西岡祖学氏（崇禅寺前住職）の手記は『ながら -大阪大空襲を語り継いで-』昭和58（1983）年に「兄嫁の死-崇禅寺の惨状」として掲載。6月7日の空襲では崇禅寺の境内に1トン爆弾が4つ、小型爆弾や焼夷弾が無数に落ち、戦後不発弾として二つが発見されている。この空襲で多くの人々が亡くなり啓発小学校下（山口町、日之出町、飛鳥町）518名の埋葬に、住職として立ち会った祖学氏。あまりの数に焼くことができず土葬にしたが、戦後10年ほど経ち、あまりにも気の毒だと掘り出し、長柄に運び洗って火葬にして戦災者の墓碑を2カ所に作っておさめたという。今も崇禅寺では6月7日には慰霊祭が開かれている。